おらほの最上川学　朝日町五百川峡谷編

最上川の荒砥～左沢間およそ25kmは、古くから「五百川峡谷」と呼ばれてきました。最上川の中で、唯一ここだけが連続する瀬を持っていますが、その流れはドラマチックな歴史を残し、私たちの生活や環境に思いがけないメリットをもたらしてきました。第二回目の最上川学では、エコミュージアム五百川峡谷案内人として活躍なさっている若月啓二氏（西船渡）に、五百川峡谷の舟運のはじまりについて現地見学も交え教えていただきました。以下、講義の一部要約になりますがご報告いたします。

朝日町宝ファイル　No.0602「最上川水運の革命」

～五百川峡谷開削の歴史を探る～

最上川の荒砥・左沢間は五百川峡谷と呼ばれ、急流で難所が多い上に、昔は峡谷入り口の菖蒲（白鷹町）に黒滝という丈余（約3m）の滝があり、船の運行ができませんでした。従って米沢藩のすべての物資の藩外輸送は山越えを強いられ、幕領の年貢米は二井宿峠か板谷峠越えで福島まで馬で運び、阿武隈川を船で下り、東廻りの回船で江戸まで運んだので、費用がかさんだほか荷傷みがありました。

元禄（約300年前）の頃、米沢藩の御用商人西村久左衛門は、この黒滝をはじめとする五百川峡谷の難所を開削すれば、荷を藩内から船だけで酒田まで下すことができ、当時河村瑞賢により開発されていた日本海西廻り航路に結びつければ、航路は下関・瀬戸内海・大阪と長くなるが極めて安全に荷傷みもなく江戸まで運べると考えました。

西村の本業は青苧商でしたが、幸い縁戚に角倉了似という大土木事業家がおり、その援助で間兵衛（まへい）という優秀な手代を譲り受け、綿密な調査をさせた上、船大工は大石田から、船鍛冶は越後の飛鳥井村から呼び寄せて準備し、藩および幕府の許可を取り付け、元禄6年（1693）開削にとりかかりました。

その工法は、川の流れを迂回させて滝を干上がらせ、岩の上で焚き火をして岩を焼き、川水を掛けて岩を割ったり、岩盤の上に高い櫓（やぐら）を建て、重い鉄錐をロープで縛り、大勢で吊り上げて落とす「どん突き工法」を用いたりしました。工期は1年3ヶ月、総工費1万7千両（現在で17億円）の巨費を投じて翌7年9月開通。間兵衛船と呼ばれた船は米沢藩米を積んで、五百川峡谷を矢のように下り酒田まで通船したのです。この上下の通船がもたらした恩恵ははかり知れず、まさに水運の革命とも言えるものでした。

しかし昔の事ゆえ、工事の成功や船の安全には神仏の加護を祈ることが第一で、川沿いの神仏に、堂宇の再建や鰐口の奉納などの安全祈願が行われました。また、この舟運を持続するため、菖蒲と左沢には船陣屋を置き通船を管理し、途中には通船差配役を置いて、船を曳き上げる綱手道の整備や難波船の濡れ米の処理などをさせました。

五百川峡谷の朝日町域には大滝瀬・どうぎ瀬・三階滝などの難所が多くあり、しばしば船が難破し、その都度濡れ米を引き揚げました。これには川沿いの百姓が頼まれ、引き揚げた米は払い受けて餅をついたそうで「かぶたれ餅」と言われました。

しかし、この舟運は後に訳あって西村から藩運営に変わりました。そして後年、陸上交通の発達でその役目を終えました。綱手道も今は殆ど姿を消して見られなくなりました。

若月啓二（わかつき　けいじ）氏

昭和5年生まれ。元朝日中学校教諭。
『最上の瀬音とともに～西船渡の歴史～』編集を担当。
現在は"西船渡の歴史を読む会"を主宰。（会員17人）また、朝日町エコミュージアム案内人の会では、西船渡と五百川峡谷の案内人としても活躍。

※ 詳しくまとめられた若月氏の講義原稿および資料は、エコルームで閲覧できます。
必要な方には複写いたします。